

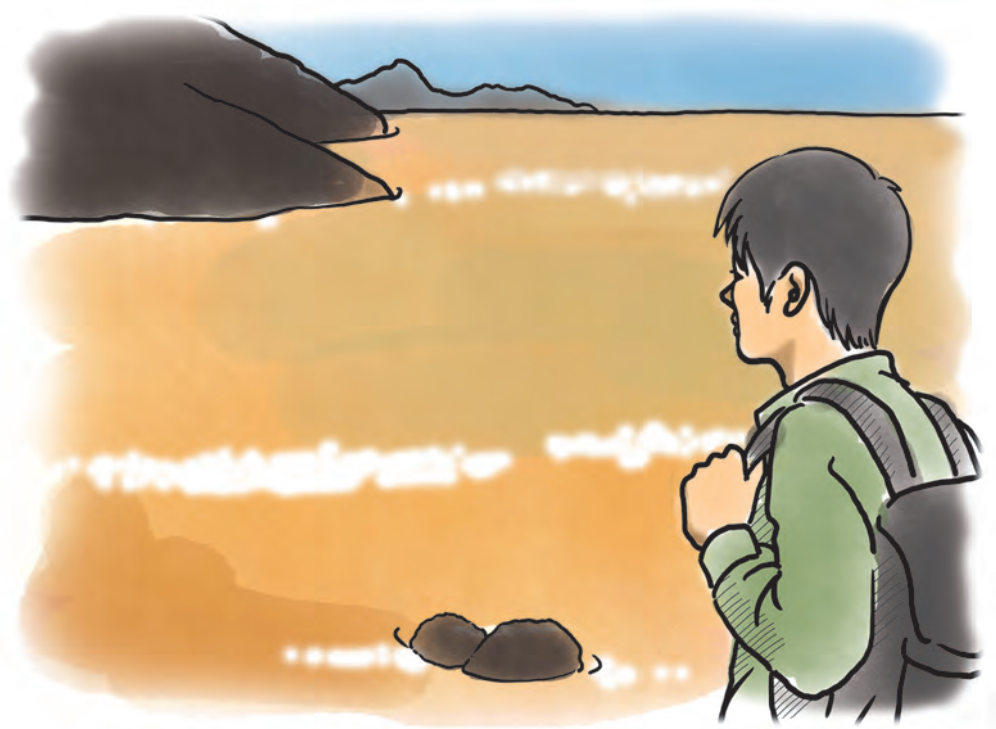
海は泣いている

吉嶺全二よしみねぜんじ

「うわーっ、なんだこの海は……。」

美しくすき通ったエメラルドグリーン、コバルトブルーがあざやかだった海が、一面赤くにごっているではないか。東京とうきょうの大学を卒業してふるさともどった吉嶺全二よしみねぜんじは、それまで見たことがなかった海の色にわが目をうたがい、言葉を失った。

「雨がふるたびに川から流れこむ赤土で海が赤くにごり、しかもサンゴしょうのリーフいっぱい広がっていくのが「赤土おせん」である。それが今、沖縄おきなわのほこりであり、世界の宝物たからものであるサンゴとサンゴしょうを住みかとしている熱帯魚を死に追いやっている。





水中カメラマン吉嶺全二は、約五十年間もふるさとの海とサンゴを見続けてきた。

吉嶺は、少年時代から海が大好きで、毎日のように仲間たちと連れだって泳ぎに行き、色あざやかなサンゴと熱帯魚をあきることなくながめていた。

成長するにつれて吉嶺は、美しいサンゴを写真におさめたくなった。そして、貯金をすべてはたいて水中カメラを買い、海にもぐるたびにサンゴのさつえいを続けた。

その後、大学生時代を東京で過ごした吉嶺だったが、卒業して沖縄にもどると同時に、再びもぐり始めた。

（おや、変だぞ。以前のサンゴと何かがちがう。）

急いで数年前に写した同じ場所の写真を取り出して比べてみた。あざやかだったサンゴは、まるで石や岩はだのような灰色に変わっていた。吉嶺は大きなショックを受け、沖縄県や海に關係する多くの人々に、数年前と現在の写真を見せて歩いた。しかし、特別な例だとして、なかなか理解してもらえなかった。（よし、サンゴの写真をでるだけたくさんとろう。写真で現実をうったえて、わかってもらおうしかない。）

こうして、吉嶺は同じ場所を定期的にさつえいする「定点観

測」を始めた。海の中は目印になるものが少なく、同じ場所をさがし出すのに大変苦勞した。

二、三日かけてもさがせないことが多い、何度もあきらめてしまいたい気持ちになったが、美しかったサンゴの様子を思い出すと、気力がふるい立つのだった。吉嶺は、多くの場所の「定点観測」を続けていくうちに、赤土が積もっている場所ほどサンゴがひどい状態になっていることに気付いた。

光を食べる動物ともいわれているサンゴは、赤土で光がさえぎられては生きていけない。しかも、川から流れてくる水や土に畑で使っている農薬や化学肥料などがふくまれていたりすれば、サンゴにとって大きなダメージになる。サンゴが少なくなるにつれて、色あざやかな魚たちも急速に減っていった。

写真を通し、吉嶺は多くの人々に赤土





の害をうったえ続けた。こうした努力が実り、沖縄県も積極的に海やサンゴの保護に乗りだすことになった。そして、一九九五年、「赤土防止条例」の制定が実現した。

三十年以上も「定点観測」を続けた吉嶺全二は、さつえいし続けてきたあざやかなサンゴの世界、定点観測でわかったサンゴの生と死、サンゴを死に追いやるものなどを「沖縄海は泣いている」という本にまとめた。

六十二才のとき、吉嶺が大好きな沖縄の海でサンゴのさつえい中になくなった。その翌年の一九九八年、自然を守る活動が多くの人々にみとめられ、県民初の「田尻賞」を受賞した。

(作 沖縄県道徳教育研究会／絵 イラストメーカーズ・ふじたまさみ)

- 1 吉嶺さんは、どんな思いで定点観測を続けたのだろうか。
- 2 あなたは、吉嶺さんからどんなことを学んだだろう。